

# 1 宇和島藩蔵屋敷跡

北区中之島3-2-4(朝日新聞社大阪本社)

▶ 地下鉄四ツ橋線肥後橋駅付近にある朝日新聞社が建っている地は、江戸期には宇和島藩の蔵屋敷でした。朝日新聞社は、大正5年(1916)までは譲り受けた蔵屋敷の建物をそのまま使っていました。



宇和島藩は、元和元年(1615)伊達政宗の長男 秀宗が十萬石の領主となってから、幕末まで9代にわたって伊達氏が統治しました。

幕末期、幕末四賢候の一人に数えられる宇和島藩第8代藩主伊達宗城は、「蛮社の獄」で捕らえられていた高野長英、緒方洪庵の適塾の塾頭も務めた村田蔵六(後の大村益次郎)など優秀な人材を登用しました。

また、イギリスの公使ハリー・パークスを宇和島に迎えるなど開明的な藩主でした。

將軍継嗣問題で一橋慶喜の擁立を図ったため、安政の大獄により隠居処分を受けますが、依然として藩内では実権を握っていました。

宗家である仙台藩の伊達家は奥羽列藩同盟に入っていたため宇和島藩は微妙な立場に追い込まれることとなりますが、伊達宗城自身が新政府の外国事務総督の重職に就き、「兵庫開港」「神戸事件」「堺事件」などの難局を乗り切ります。

明治4年(1871)には清国に派遣され、条約締結に努めるなど新政府に貢献しました。

慶応2年(1866)12月、イギリスの外交官として宇和島を訪れたアーネスト・サトウは、日記に次のような記録を残しています。

「12月3日。隠居の伊達伊予守(8代藩主伊達宗城)、その息子(9代藩主伊達宗紀)がみな来ていた。隠居は、非常に特徴のある顔立ちと非常に大きな鼻をした背の高い男で、全体として容姿はみにくく、その態度に尊大なところがある。(以下省略)」

西区新町2と北堀江1の間に当時長堀川が流れていてその間に「宇和島橋」が架かっていました。

## 宇和島橋跡

西区新町2、北堀江1

「橋を渡れば、そこは市の側芝居小屋」

宇和島橋は、元和8年(1622)、長堀川が改作と同時に架けられた橋です。

当初は「遠江橋」という名称でしたが、明暦3年(1657)の古地図により「宇和島橋」と名称変更がされています。

江戸期では、難波神社(中央区博労町)の夏祭りで、宇和島橋の上で太鼓を持って高く差し上げながら叩いたり、車輪のように廻しながら各人の腕前を競い合う行事が行われていました。

宇和島橋の名の由来ですが、橋が架けられた際、橋の南詰(現在の北堀江1)に宇和島藩伊達遠江守の蔵屋敷があったことから「遠江橋」→「宇和島橋」と名づけられました。宇和島藩蔵屋敷は、享保9年(1724)、現在の朝日新聞大阪本社がある位置に移転しましたが、廃橋まで橋名は変更されませんでした。

宇和島橋の南にある道は、現在雑居ビルが建ち並び、大野記念病院まで通じる道ですが、かつてこの道は、「北堀江・市之側の筋」という名で有名でした。

最初は青物市場から始まりましたが、その市の東西(左右)に興行された芝居小屋で有名になりました。

また北詰は、大坂の新町遊郭は京都の島原・江戸の吉原とともに、近世三大遊里の一つと数えられましたが、ここは新町遊郭の南からの入口として「長堀口門」がありました。



宇和島橋南詰:堀江市之側跡

## 新町遊郭「長堀口門」跡

西区新町2-28(三陽商会の東)

大阪の新町遊郭は京都の島原・江戸の吉原とともに、近世三大遊里の一つとして数えられましたが、ここは新町遊郭の南からの入口として「長堀口門」がありました。現在はオフィス街ですが、北へ約300mのところ「新町北公園」(大阪厚生年金会館の前)がありますが、新町廊で有名な店が、九軒町(くけんまち)にあった「吉田屋」で、店の前に提灯をつるし、堤を築き桜を植えたことが後に桜の名所となった「九軒桜堤跡」の石碑があります。東からの入口は、新町橋跡にあり現在石碑も残っています。



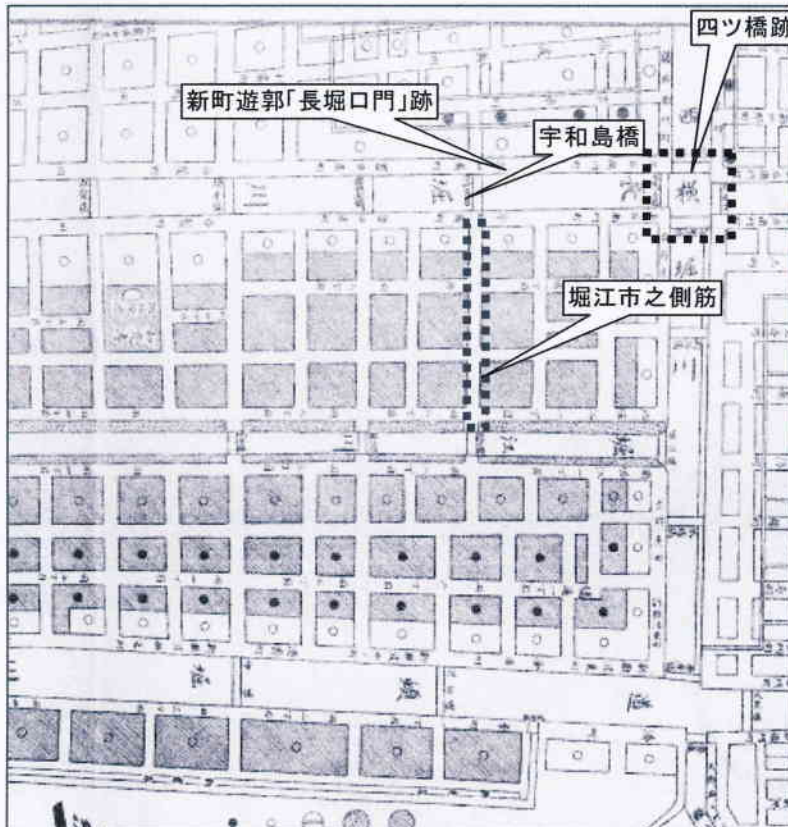
宇和島橋北詰 新町遊郭「長堀口門」跡周辺



## 堀江市之側 (いちのかわ) 跡

西区北堀江1 (宇和島橋南詰より南の筋)

宇和島橋南詰から南北に道がありますが、これを「堀江市之側(いちのかわ)」といいます。初めは「青物市場」で人が集まったのですが、その後、この筋の両脇に次々と興行されるようになった「芝居小屋」が人気を集めました。江戸期に人形浄瑠璃が道頓堀などで興行され、ますます芝居人気が増しますが、幕末期には、興行地を天王寺から堀江に移るケースが多くなりました。竹本義太夫、豊竹若太夫、植村文楽軒など著名人が、「北堀江・市之側の筋」に移ってきています。宇和島橋の南詰西の辻南にあった「明楽座」は人気があったようです。文久元年(1861)イギリスの公使オールコックが来坂したとき、「堀江の芝居を見た」と記録に残しています。しかし、明治後期から道頓堀の「弁天座」「朝日座」「中座」が挽回し、激しい競争の末、道頓堀に人気が出て、ついに堀江市之側は大正期の半ばごろ廃れてしまいました。



現在の堀江市之側跡

## 2 西横堀川跡

西区江戸堀1-1

- ▶ 西横堀川は、元和3年(1617)、肥後出身の材木商 永瀬七郎右衛門によって開削されました。  
この川は肥後橋の上手から分かれて南に流れる川で、江戸堀川、京町堀川、阿波堀川、立売堀川に別れて行き、四ツ橋で長堀川と交わります。(交差します)  
さらに南に流れ、堀江川に分かれ、湊町で道頓堀川に合流します。

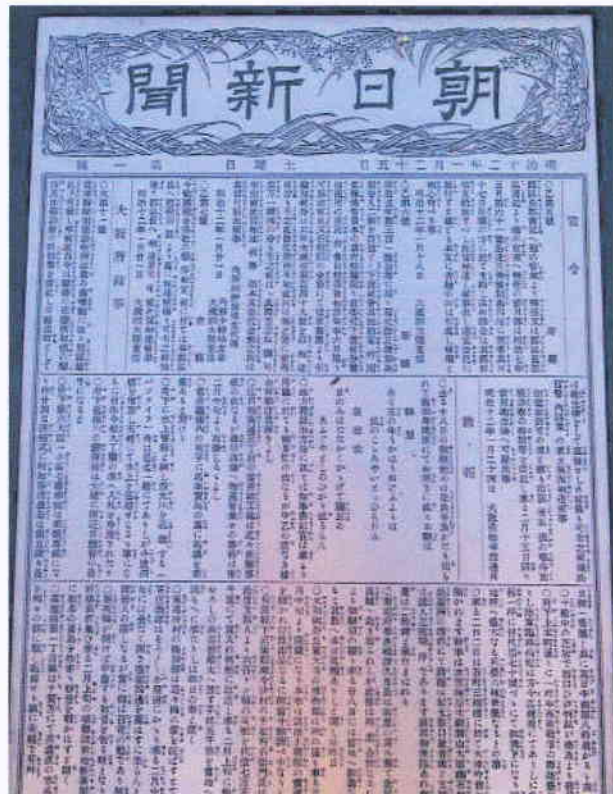


昭和37年(1962)、西横堀川は埋め立てられました。  
現在、西横堀川の跡地には、阪神高速道路環状線北行き車線があります。

## 3 朝日新聞創刊の地

西区江戸堀2-1-1

- ▶ 朝日新聞は明治12年(1879年)1月25日、大阪で創刊第1号を発行しました。  
朝日新聞の創始者は村山龍平と、後に加わる上野理一です。  
紙面は小型4ページ、総ふりがな・絵入りで定価1銭、1日平均販売部数は約1,000部でした。  
「わかりやすく、親しみやすい大衆向けの新聞」というのが創業時のモットーで、3年後には、編集方針として「報道中心主義」と「公平無私」を掲げました。  
これは官権派や民権派の政論新聞が主流だった当時では異色のもので、その精神は「不偏不党」を柱とする現在の朝日新聞綱領となって受け継がれています。  
創刊4年後に早くも2万部を超えて全国首位に、明治21年(1888年)には東京へ進出し、東京朝日新聞を発刊しました。さらに、活字の自社鑄造や記者の欧米派遣、輪転機の導入など、いずれも日本の新聞界では初めての新機軸をつぎつぎ打ち出し、今日の新聞の原型を生み出しました。



朝日新聞創刊号

夏目漱石が東京帝大と一高の講師を辞任して40歳で朝日新聞社に入社しています。  
「吾輩は猫である」「坊っちゃん」を発表してまもないころで文壇の注目を集めていました。  
月給、賞与を合わせた年収は2800円で講師時代より約1000円も多かったようです。  
入社第1作「虞美人草」以降、「三四郎」「それから」など次々に連載。  
自ら提案した文芸欄の編集にあたりました。石川啄木も校正係として東朝入社。在社中に歌集「一握の砂」を出版しています。

むら やま りゆう へい

## 村山 龍平

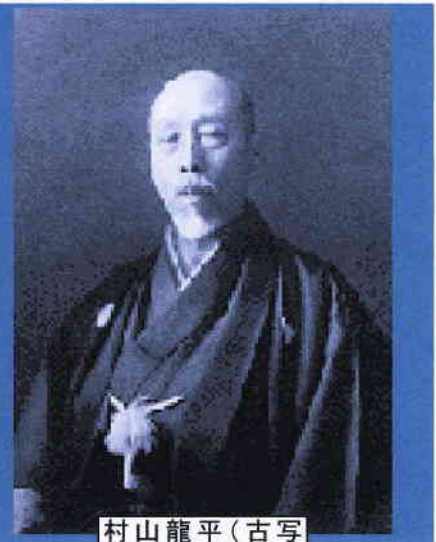
嘉永3年(1850)、紀州徳川藩の支藩、伊勢田丸の城下(現在の三重県度会郡玉城町田丸)で藩士村山守雄の長男として生まれました。父 守雄は、版籍奉還後、士族の身分を捨て田丸城下を去り、明治4年、大阪に移り住みました。

明治12年(1878)1月、村山龍平が29才の時、朝日新聞を創刊しました。

その1年後、共同経営を行う上野理一が入社し、今日の朝日新聞社へと発展していきます。

昭和7年(1932)、三重県田丸町旧村山家屋敷跡を町に寄付し、同9年、町はここに「村山龍平翁記念碑」を建て、「香雪園」という名の遊園地とします。

昭和58年(1983)、玉城町田丸114-1に記念館が開館されました。



村山龍平(古写)

うえ の りいち

## 上野 理一

上野理一は嘉永元年(1848)10月、丹波篠山町西町の生糸商西垣屋の家に生まれます。

明治3年(1870)地方の官吏を経て、明治13年(1880)10月、当時まだ大阪の小新聞でしかなかった朝日新聞社へ入社します。

翌年、経営者だった村山龍平から経営の一切を任されることになり、出資金総額の三分の二を村山隆平が、三分の一を上野理一が分担することとなります。

その後の経営を村山と二人で行い、優秀な人材を次々に招き、デモクラシーを社風とする現在の朝日新聞の基礎をつくりあげました。



上野理一(古写真)

朝日主催の第1回全国中等学校優勝野球大会を大正4年(1915)に開催しました。

最初の会場は豊中グラウンド。

全国10地方の予選に73校が参加、代表校は10校。

京都二中が決勝で秋田中を2-1で破り優勝。その後、会場は鳴尾運動場から現在の甲子園球場に。戦争で、一時中断されたが、平成20年(2008)で第90回記念大会となりました。



豊中グラウンド跡に残る高校野球発祥の地の碑(豊中市)